



米国デイトン国際平和博物館の移転

事務局長 ケビン・ケリー *Kevin Kelly*

ボスニア紛争を終結させた 1995 年のデイトン和平合意の調印から 9 年後、ラルフ・ダル Ralph Dull とクリスティン・ダル Christine Dull、J・フレデリック・アーメント J. Frederick Arment、スティーブ・フライバーグ Steve Fryburg、リサ・ウォルターズ Lisa Wolters の 5 人は、デイトン国際平和博物館 Dayton International Peace Museum を設立しました。博物館設立の目的のひとつは、ボスニアでの戦争を終結させ世界平和に貢献したデイトンの役割を記念することでしたが、その他にも多くの重要な目標がありました。しかし、そのうちのいくつかは、未だに実現が難しい状態のままです。博物館の設立者たちは熱意を持って、資金面での問題に直面しつつも、終わりの見えない戦争・貧困・人種差別・性差別・経済的格差の現状に対して組織的な取り組みを行ってきました。人々、特に若者たちが、戦争や人種差別・暴力に代わるものを学べる場所を作りたいと望んでいたの

です。1 年も経たないうちに、この設立されたばかりの団体は、モニュメント・アベニュー(記念碑大通り)のアイザック・ポラック・ハウス the Isaac Pollack House に博物館を開設するための場所を見つけました。多くの人々が手助けのためにボランティア登録してくれました。



ドローンで撮影した
コートハウス・スクエア

私たちは、博物館の将来の成長のための必要なステップとして、コートハウス・スクエア Courthouse Square へ移転することを発表できることを嬉しく思います。このよく目立つスペースは、デイトンの中心街の中央に位置しています。この新しい博物館は、通りに面

して大きな窓がある建物の1階にあり、近代的で広々としています。交通の便も良く、来館していただきやすい場所ですので、これまでの場所よりも年に数千人は多く来館者を迎えることができるでしょう。新しい博物館の前庭は、文字通りデイトンの街の中心的な広場となるでしょう。この場所は1859年にエイブラハム・リンカーン Abraham Lincoln がデイトンの人々に語りかけた場所からほど近いところにあります。この素晴らしい場所へ移転できたことにより、私たちの使命をより効果的な方法で推進できるように内部空間も改装する予定です。展示室・映写室・スタジオ、そして広い多目的教室には、最先端の技術を活用する予定です。私たちは、国際平和デーである9月21日にテープカットを行います。

※(訳者注)1981年、国際総会は、平和の理想を記念・強化するため「国際平和デー」を制定したと宣言した。国際平和デーの日は、総会の通常会議が始まる9月の第3火曜日とされた

また、もう一つの喜ばしいお知らせがあります。コートハウス・スクエアでの開館記念として、貸与していただいたマーティン・ルーサー・キング Martin Luther King の唯一のオリジナルのカラー写真のコレクションを中心に展示することです。白黒写真は誰もが目にしたことがあると思いますが、今回は貴重なフルカラー写真のコレクションを展示させていただけることになりました。そして当博物館の移転と再開館を記念する特別講演会のゲストス

ピーカーの一人に、50年以上前にその写真を撮影した方を予定しています。10月からは、地域の学校にもこの展示を見学していただけるようご招待しています。この移転のために、ポラックハウスは売却する予定です。現在の場所から数区画しか離れていませんが、この移転は当館スタッフの総力を挙げて行う活動となります。私たちは、少人数の役員とボランティア、そして1人の専任スタッフで運営を続けています。私たちは、これまで以上に、熱心にご支援いただける方々を必要としています。これまで以上の意欲的な活動が予想され、そのためには支援者の方々の時間、才能、そして経済的ご支援が必要となります。詳細は [こちら](#)と[こちら](#)をご覧ください。



デイトン国際平和ミュージアムの新拠点、
モンゴメリー・コートハウス広場

英国のブラッドフォード Bradford でも、平和博物館の移転先を探していましたが、その計画に重要な進展が見られました。近いうちにより知らせを発表するつもりです。

ひめゆり平和祈念資料館 リニューアル・オープン

ひめゆり平和研究所 狩俣英美

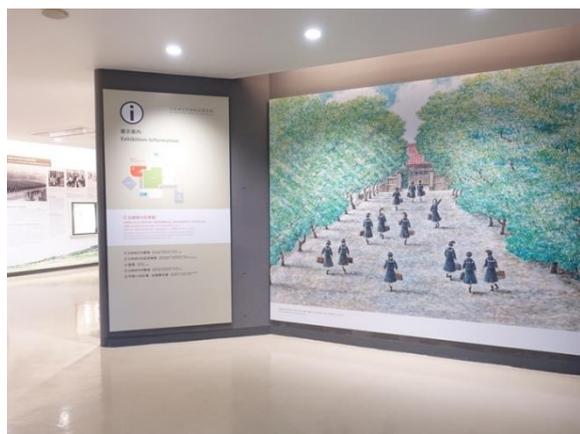
2021年4月12日、ひめゆり平和祈念資料館は、新しい展示パネル・展示品・映像を加えてリニューアル・オープンしました。今回、17年ぶりに展示内容を刷新しました。2004年のリニューアルでは、「ひめゆり学徒の体験者が説明しなくても伝わる展示」を目標としていました。それから17年が経ち、来館者の感想から「ピンとこない」という感想が見られるようになりました。両親や祖父母さえも戦争体験のない“戦争からさらに遠くなった世代”にとって、よりアクセスしやすい（分かりやすい）展示をつくるために、資料館は2回目のリニューアルに取り組みました。

ひめゆり平和祈念資料館は、元ひめゆり学徒によって1989年に設立された民間の資料館です。生き残った元ひめゆり学徒たちは、沖縄戦で亡くなったひめゆりの生徒や先生をしのび、二度と同じ悲劇を繰り返すことのないよう、

ひめゆり学徒隊の戦争体験を伝える平和ミュージアムを設立しました。現在、ひめゆり平和祈念資料館は、沖縄戦を語り継ぐ象徴的な場所の一つとなっています。その場所で、元ひめゆり学徒は、設立者として、運営や戦争体験を語る役割を担ってきました。また、自ら戦争体験を語れなくなる日を見越して、戦争体験のない若い世代の資料館職員の育成にも携わりました。そして、元ひめゆり学徒の戦争体験継承のバトンは新しい資料館職員へと引き継がれています。

今回のリニューアルの特徴の一つは、戦争を体験していない資料館職員が展示内容をつくりあげたことです。若い世代の来館者が、ひめゆり学徒たちをより身近に感じてもらえるよう工夫を凝らしました。新しい展示では、（現代の生徒たちと同じように）10代のひめゆり学徒たちにも楽しい学校生活があった一方で、彼女たちが日本の勝利を信じて戦場へと動員された当時の時代背景を視覚的な資料（写真、イラストや映像）を通して描いています。資料館のさまざまな展示資料から、来館者は、ひめゆり学徒たちがいかに普通の10代の生徒たちであったかを理解し、そして、彼女たちを軍国少女へと変えた戦時下の生活がいかに現代と違うのかに気づくことができるでしょう。

第一展示室「ひめゆりの学校」では、ひめゆりの生徒たちが友達と学校に登校する絵が展示され、ひめゆり校舎の入り口に入るように来館者を資料館へと迎え入れます。第二展示室では、証言映像や、生徒の持ち物、戦場の様子を描いた絵や写真などの視覚的な情報を通して、ひめゆり学徒隊が沖縄陸軍病院でどのような看護活動にあたったのかを説明しています。今回のリニューアルでは、生き残ったひめゆり学徒に焦点をあてた第五展示室「ひめゆりの戦後」という新しい展示室も設けました。証言映像には英語字幕が加えられ、展示パネルには英訳が付いています。多くの海外からの来館者がリニューアルした資料館を訪れ、ひめゆりのメッセージを受け取ってくださることを願っています。



ひめゆりの校舎入り口が描かれた展示パネルのある第一展示室

コロナウイルス感染拡大により、資料館は深刻な経営の危機に直面してい

ます。資料館の存続を守るために、初めてオンラインによる寄付システムを導入しました。

[<https://syncable.biz/associate/himeyuri/>](https://syncable.biz/associate/himeyuri/)

ひめゆり平和祈念資料館の未来を支援して下さる皆さまに、心からお礼を申し上げます。



イラストや映像などの視覚的な情報や実物資料が並ぶ第二展示室

オーストラリア国立海洋博物館で「戦争と平和：広島・長崎への原爆投下」展

シドニーのオーストラリア国立海洋博物館 Australia National Maritime Museum では、5月21日から8月29日まで、広島平和記念資料館と広島・長崎両市から提供された特別展を開催しています。この特別展は、75周年記念プログラム「[太平洋の戦争と平和 75](#) (War and Peace in the Pacific 75)」の一環です。「ヒロシマ・ナガサキ展」は、1995年以来 19 カ国 53 都市で開催

されています。1945年8月6日に広島
の、9日に長崎の空を覆った巨大なキノ
コ雲の下で、何が起きたのかを、犠牲
者の遺品や写真パネルなどを通じて伝
えています。また、1955年に原爆時の
放射線の影響で白血病を発症した佐々
木禎子さんが折った千羽鶴の一部も展
示されています。禎子さんは、もう一
度元気になりたいと願い千羽鶴を折り、
亡くなる前に禎子さんは千羽の目標を
達成しました。今では折り鶴は平和の
長年のシンボルの一つとなっています。
オーストラリア国立海洋博物館のケビ
ン・サンプション Kevin Sumption 館長
は、この特別展を「当博物館にとって、
これまでで最も力強い作品群」と評し
ています。この特別展では、破壊・復
興・繁栄のストーリーを紹介し、核兵
器のない平和な世界を実現することの
重要性を訴えています。詳細は、[こち
ら](#)と[こちら](#)をご覧ください。



シドニーでの「戦争と平和」展



丸木位里・丸木俊夫妻の 『原爆の図』の修復

広島への原爆の投下直後の様子を目撃した夫妻が描いた連作の有名な絵画が、最初の作品が発表されてから71年後に初めて修復されることになりました。1995年にノーベル平和賞の候補にもなった故丸木位里・俊夫妻の『原爆の図』と題される15枚の連作は、長い年月の間に劣化し、害虫による被害も出ていました。

「原爆の悲劇が二度と起こらないように、世代を超えて（作品を）伝えていきたいのです」と、この作品を保存している埼玉県東松山市の「原爆の図丸木美術館」の、岡村幸宣学芸員は語っています。高さ1.8メートル、幅7.2メートルのパネルに描かれたそれぞれの作品は、丸木夫妻が1945年8月6日の原爆投下の数日後に広島を訪れた際の体験をもとに描かれています。丸木夫妻は、残留放射能に曝されながら焼け野原を歩いた経験をもとに、1950年から1982年にかけて計15点の作品を発表しました。そのうちの14点がこの美術館で展示されています。終戦から5年後に公開されたこの連作の最初の作品『幽霊』は、美術館が貯めてきた基金を使って数百万円かけて修復されることになっています。この作品は、衣服が焼かれ、皮膚にひどいやけどを負った後、腕を前に突き出して歩いている人々を描いています。今回の修復の

ため、梱包して愛知芸術大学に送ることになり、修復中は複製を展示する予定です。



写真提供：原爆の図丸木美術館

GHQ(連合国軍総司令部)による日本占領下で原爆に関する報道は検閲されていたこともあり、この芸術家夫妻は広島で暮らしていた普通の人々に焦点を当てて作品を制作しました。彼らは、第二次世界大戦末期に米国が広島・長崎へ投下した原爆の恐怖を、30年以上の歳月をかけてこの連作で描いたのです。岡村学芸員は「被爆者がここまで視覚的に表現されたのは初めてで、歴史的に大きな意味があります」と語り、資金が許せば他のパネルも順次修復していきたいということも付け加えています。



写真提供：原爆の図丸木美術館

丸木夫妻は、1950年に第二部『火』と第三部『水』を発表し、積極的に巡回展を行い、1951年11月までに51カ所で約65万人がその巡回展を訪れました。1953年にはヨーロッパやアジアでも巡回展が開催され、同年には世界平和評議会から金賞が授与されました。夫妻の作品では、被害者としての日本人だけでなく、日本人によって苦しめられた被害者の苦難も描いています。『アメリカ人捕虜の死』(第13部)という作品では、広島での原爆投下後、日本人に暴行されたアメリカ人捕虜を描いており、『からす』(第14部)という作品では、韓国・朝鮮人被爆者への差別的な態度を描いています。丸木夫妻は他にも、南京大虐殺やアウシュビッツ強制収容所、沖縄戦など、戦争に関連する題材を扱いました。丸木位里は1995年に94歳で、丸木俊は2000年に87歳で亡くなりました。

『原爆の図』の修復の詳細については[こちら](#)をご覧ください。春日真人氏(NHKで長くプロデューサーを務め、丸木美術館のドキュメンタリーを制作中)が丸木美術館で撮影した英語の解説付きの『原爆の図』の歴史についての4分間の映像は[こちらのリンク](#)にあります。『原爆の図』をめぐる映画『妣(はは)たちのくにへー原爆の図2021-』の2分間の予告編は[こちら](#)、岡村幸宣学芸員へのインタビュー記事(英文)は[こちら](#)からご覧ください。(16頁には、丸木夫妻とアンドレア

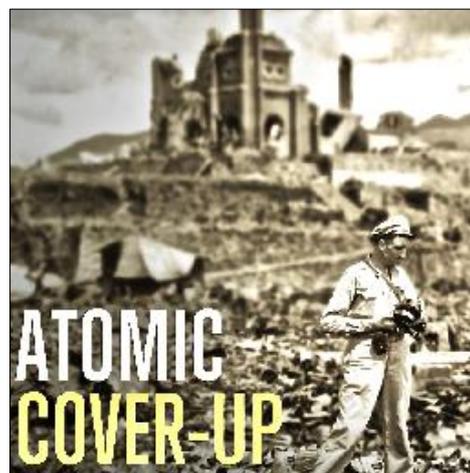
ス・ラッコオ Andreas Latzko についての記事があります。ご覧下さい。)

映画『原爆の隠蔽 Atomic Cover-up』

グレッグ・ミッチェル Greg Mitchell 監督の『原爆の隠蔽 Atomic Cover-up』が、3月に開催されたシネクエスト映画祭 Cinequest Film Festival (シリコンバレーで開催され、USA Today 紙の読者投票で全米最優秀映画祭に選ばれた映画祭)で世界初上映されました。この映画は、1945年に広島と長崎へ原爆投下された直後に、まだ放射能が残存する中で命の危険を顧みずに撮影をおこなった日本および米国の勇敢なカメラマンやスタッフたちの独自の視点や証言、そして驚くべき映像から原爆投下の実態を探った最初のドキュメンタリーです。この映画では、日本のニュース映画の撮影隊と米軍の特別撮影チーム(カラーフィルムで唯一撮影された)によって撮影された歴史的な映像がどのようにして押収され、最高機密に分類され、その後米国政府関係者によって何十年にもわたって隠蔽されてきたのか、を明らかにしています。そして危険な核軍拡競争が繰り広げられる中で、原爆投下による人的被害の全容がどのように隠されてしまったのか、ということも告発しています。一方で、これらの映像の制作者たちは、核拡散を止めるために、原爆の実態を明らか

にしようと、自分たちの撮影した衝撃的な映像フィルムを見つけ出し、公開しようと英雄的な努力を続けました。

この映画は世界中で賞賛されており、『原子力科学者会報 the *Bulletin of the Atomic Scientists*』(世界終末時計を毎年掲載している学術雑誌。18頁参照)のステイーブン・シュワルツ Stephen Schwartz 氏は、「強力で説得力のある新しいドキュメンタリーだ。米国が広島と長崎に原爆を投下した結果を撮影したフィルムを機密扱いとして封じ込めていなかったなら、私たちは核軍拡競争をしていただろうか?」と述べています。ニューヨーク平和映画祭 *New York Peace Film Festival* の主宰者であるタナカ有美氏は、「人を動かす力のある必見の映画です!これらの話は次世代のために語られる必要があります」とコメントを書いています。グレッグ・ミッチェルが自身の映画について書いた[短い記事](#)の中で、これらと同様の多くのコメントが紹介されています。



映画のポスター

共同プロデューサーのスザンヌ・ミッチェル Suzanne Mitchell (グレッグ・ミッチェルの親族ではない) による [Vimeoの2分間の予告編](#) では、原爆投下の翌日に広島に派遣された日本の撮影隊が、東京のダグラス・マッカーサー Douglas MacArthur 元帥の司令部から撮影中止の命令を受け、撮影済みのフィルムも押収されてしまった状況を、見事な映像とともに詳しく紹介しています。その後、米軍は独自の撮影隊を派遣し、「隠されたホロコースト」とも言えるような実態を3万フィートのフィルムに撮影しました。この映像の存在は長年秘密にされていました。

この新しい映画は、グレッグ・ミッチェルの著書『原爆の隠蔽〜2人の米軍兵士、広島と長崎、そしてこれまで決して作られなかった最も重要な映画 *Atomic Cover-up: Two U.S. Soldiers, Hiroshima & Nagasaki and The Greatest Movie Never Made*』(2012年発行)に基づいています。この著書は、1945~46年のフィルム映像への弾圧をテーマとした最初の本です。2011年8月9日に収録された著者の15分間の素晴らしい啓発的なインタビューが [こちらのリンク](#) にあります。また、このインタビューには、ウィリアム・L. ローレンス William L. Laurence についての、独立系ジャーナリストのデビッド・グッドマン David Goodman 氏へのインタビューの抜粋も含まれています。ローレンスは、マンハッタン計画と原子爆

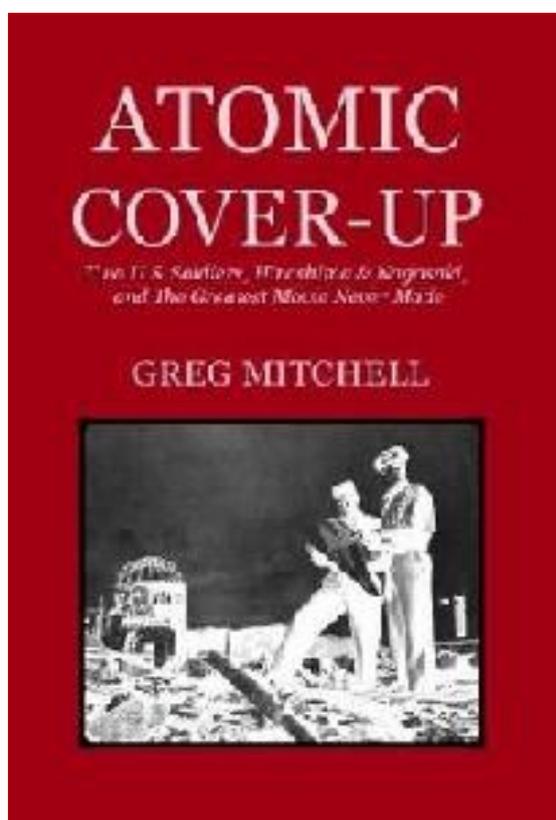
弾の使用について、米国の旧陸軍省から秘密裏に金をもらってニューヨーク・タイムズ紙 *the New York Times* にプロパガンダ記事を書くことを仕事とした最初の「Embedded Journalist(軍に組み込まれ、軍と一体化したジャーナリスト)」でした。彼は、1945年7月にニューメキシコ州アラモゴード Alamogordo, New Mexico で行われた歴史的な核実験「トリニティ・テスト Trinity Test」に立ち会った唯一の記者であり、長崎で行われた原爆投下作戦に同行することを許された唯一の記者でもありました。また、「原子力時代 Atomic Age」という言葉を生み出した人物としても知られています。

共同プロデューサーのミッチェルの2011年の記事(2017年に更新)も [こちらのリンク](#) からご覧ください。

ミッチェルの最新作『始まりか終わりか〜ハリウッド、そしてアメリカ人はいかにして爆弾を心配することを止め、爆弾を愛するようになったのか *The Beginning or the End: How Hollywood – and America – Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*』(2020年)は、米国のメディアや文化が「原子力時代」にどのように向き合ったかについての初期の奮闘を記録したものです。1945年8月直後から、MGM社(とパラマウント社 Paramount、両社ともハリウッドの大手企業)は、マンハッタン計画と革新的な新兵器の発明、そしてその

新兵器の初めての使用をテーマにして、多額の予算をかけてドラマ化を開始しました。しかし、核軍拡競争への警鐘を鳴らす原子科学者たちに刺激を受けて、教訓となる話として撮影が始められたこの映画は、トルーマン大統領や軍部のプロパガンダや政治的理由により、修正や撮り直しが行われ、影響力のないものにされてしまったのです。

(23 頁の新刊情報『人生の選択 *Choosing Life*』も参照して下さい。)



グレッグ・ミッチェルの本の表紙



ニューヨーク国連本部でのピカソの『ゲルニカ』のタペストリーの展示 終了

1937 年のスペイン内戦でナチス・ドイツがバスク地方 Basque の歴史的な町ゲルニカ Guernica を爆撃したことをきっかけに、パブロ・ピカソ Pablo Picasso はこの戦争犯罪を有名な絵画「ゲルニカ」として永遠に残しました。これは、世界で最も強力な反戦絵画のひとつとされており、原画はスペインのマドリード Madrid のソフィア王妃美術館 Reina [Queen] Sofia Museum に展示されています。この絵画のレプリカ(複製品)は度々制作されてきました。最も有名なレプリカは、ロックフェラー家への原画の売却を拒否していたピカソの許可を得て、ネルソン・A・ロックフェラー Nelson A. Rockefeller が 1955 年に制作を依頼したタペストリー(つづれ織り)です。1984 年、このタペストリーは国連に貸与され、約 36 年間にわたって安全保障理事会室の入口の壁に飾られてきました。2003 年、米国のイラク侵攻開始直前にコリン・パウエル Colin Powell 国務長官が国連で演説した際、このタペストリーが覆い隠されたことは世界的なニュースとなりました。

2021 年 2 月、このタペストリーは国連本部から撤去され、ロックフェラーの息子であるネルソン・A・ロックフェラー・ジュニア Nelson A. Rockefeller Jr. 氏に返還されました。ロックフェラー氏は以前から国連に作品の返還を求め

ていました。CBS ニュースの短いレポートは[こちら](#)でご覧いただけます。[こちらの記事](#)もご覧ください。

このレプリカは、フランスのオービュッソン Aubusson にあるフランス人テキスタイル・アーティスト(織物職人)、ジャクリーヌ・ドゥ・ラ・ボーメイ・デュアバッハ Jacqueline de la Baume Duerrbach の工房で、ピカソの協力を得て制作されました。その後、さらに2枚のゲルニカのタペストリーが制作されました。1枚はフランスのコルマル Colmar, France にあるウンターリンデン美術館 the Musee Unterlinden (1976年)、もう1枚は日本の群馬県立近代美術館 (1985年) に所蔵されています。この3枚のレプリカは、複製の域を超えて、それぞれが芸術作品となっています。これらのタペストリーや他のレプリカについての詳細は、マドリッドのソフィア王妃美術館のウェブサイトを参照して下さい。このウェブサイトには、作品に関する興味深い手紙や写真などの資料が多数展示されています。[こちらのリンク](#)をご覧ください。



2013年6月、ブライトンで、一般公開で開催

された「ゲルニカ」横断幕の縫製の様子
(写真提供：ブライトン大学)

50年前(1971年)にエキーポ・クロニカ Equipo Cronica (スペインのバレンシア Valencia 出身の3人の芸術家のグループ、1964~1981年)が制作したレプリカは、バレンシア近代美術館 the Institute of Modern Art in Valencia に所蔵されています。



タペストリーの前に立つアントニオ・グテーレス国連事務総長 (2017年2月1日)

(写真提供：Mary Altaffer/AP 通信)

これとは別のレプリカとしては、2012年から2014年にかけて英国のブライトン Brighton の12人の芸術家と活動家のグループが制作した「ピカソのゲルニカのリメイク(作り直す)Remaking Picasso's Guernica」があり、抗議運動の横断幕の一つとなっています。横断幕を構成するパーツは、英国とインドで開催された14回の一般公開の縫製作業によって、所定の位置に縫い付けられました。この布製の横断幕には、芸術作品としてだけでなく、抗議活動としての機能もあり、多くの政治的活動でずっと使用されてきています。ニコラ・アシュモア博士 Dr. Nicola Ashmore

が制作した3つの素晴らしい短編ビデオは、この横断幕の制作と意味を記録しています。これらのビデオは[こちら](#)から、または[こちらのリンク](#)からご覧いただけます。



香港、六四記念館(天安門事件(1989)記念館)の閉鎖

北京で1989年に起きた天安門事件 Tiananmen Square massacre の犠牲者を追悼する香港の六四記念館(天安門事件記念館)が閉鎖されました。閉鎖されたのは、民主主義を求めて平和的に抗議する人々に対して、制圧のために軍や戦車が発砲し多くが犠牲となった事件から32周年目の前日でした。当時、天安門での抗議は6週間続き、百万人もの武器を持たない学生や市民が、広場内や周辺に集まっていました。この事件での犠牲者は数百人～数千人とされています。



閉鎖前に記念館スタッフに聞き取りをする治安警察官 (写真提供: Vincent Yu/AP)

この小さな記念館の閉鎖は、香港政府が、民主主義を求める人々によるビクトリア公園でのキャンドルライトの追悼集会開催の要求を拒否した数日後の6月2日のことでした。1990年以降、毎年行なわれてきたこの追悼集会は、昨年の2020年に初めて禁止されました。しかし、何千人もの人々が、無許可の追悼集会に参加しました。2019年には約18万人の香港住民がこの追悼集会に参加していました。この都市で毎年開かれてきた虐殺の犠牲者を悼む市民集会が、中国で唯一許されていた最後の場でした。中国本土では追悼集会は禁止されていて、その話題は厳しく検閲されています。集会の禁止や記念館の閉鎖は、容易に反対意見を根絶することができる国家安全維持法を北京政府(中国政府)によって強要され、この1年で香港の人たちの自由が制限されてきた結果です。

中国政府が市民には見せたくない、記念館についての3分間のビデオは、[このリンク](#)からどうぞ。また[ここでも](#)見ることができます。



六四記念館の展示パネル
(写真提供: Kenji Kawase/Nikkei Asian Review)

記念館が再び開館できるための許可を得られるのか、現在準備中のデジタ

ル記念館が当局によって検閲されないのかなど、まだ不明です。(2019年6月発行のニューズレターNo.27、14-15頁もご覧ください)

モーリッツブルク(ドイツ)の ケーテ・コルヴィッツ・ハウス

さまざまな助成金の削減や廃止により、ドレスデン郊外のモーリッツブルク(ドイツ・ザクセン州)のケーテ・コルヴィッツ・ハウスの未来が危ぶまれています。このハウスは、戦争反対を訴えた芸術家が1944~45年に生活し、第二次世界大戦終戦の直前の1945年4月22日に他界した場所です。ケーテは、空襲でベルリンの家を破壊された後、ここに逃れていました。



ケーテ・コルヴィッツが好んで座った
バルコニーのあるハウス

5月には、6400筆以上の署名を添えた請願書が、州政府に届けられました。

偉大な芸術家であり、平和活動家であったケーテに関する重要な記念館を支え、保存してほしいと嘆願したのです。ここは、二つの世界大戦の惨事を生き抜いてきた彼女が暮らした現存する唯一の場所として、特別なところでは。州政府は2021年と2022年に、追加の経済支援を提供することに同意しました。しかし、一非営利法人NPOによる管理では長期的には財政上の不安が残ります。

記念館(ワークショップも行なわれています)は、1995年4月にコルヴィッツの没後50年を記念して開設されました。開館25周年を記念して、2020年には特別展が催される予定でしたが、コロナ禍で2021年に延期されました。自画像はコルヴィッツの作品の中でも重要です。特別展では、25人のアーティストの自画像も展示されています。それらは、彼女がいかに彼らに影響を与えてきたかを示すものです。展示は、[このリンク](#)から見るができます。ハウスの[ウェブサイト](#)では、多くの画像と共に、ドイツ語での情報を得ることができます。



ケーテ・コルヴィッツによる自画像(1924年)

サラエボ、戦時下の子どもたち博物館(ボスニア・ヘルツェゴビナ)

“狙撃兵は私の兄弟を殺し、それが私の子ども時代も殺した”

ユニークで自主的な若者主導の「戦時下の子どもたち博物館」(WCM)は、ボスニア紛争当時の子どもたちの声を集めた書物『戦時下の子どもたち War Childhood(日本では角田光代訳『ぼくたちは戦場で育った サラエボ 1992-1995』として 2015 年に集英社から出版)』(2013 年)を基にし、戦争の影響を受けた子ども時代に焦点を当てた、世界で唯一の博物館として注目を集めています。2016 年にいくつかの特別展を行った後、プロジェクト開始から7年後の 2017 年 1 月に最初の常設展をサラエボの歴史的な中心部にオープンしました。あらゆる年齢層のボスニア人に、民族の違いを強く意識させることなく、そんなに遠くない過去のトラウマと向き合う貴重な機会を提供することに成功しました。WCM は、その活動を現在も紛争が続いている地域、紛争が終結した地域、難民や避難民が再定住した地域にまで拡大しています。ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、レバノン、ウクライナ、米国でのプロジェクトで、WCM は現在および過去の戦場の子どもたちの声を届ける国際的なプ

ラットフォームとなりつつあります。WCM は、欧州博物館大賞 European Museum of the Year Awards で、2018 年欧州評議会博物館賞を受賞しました。

戦時下の子ども博物館は、戦争を生き延びた人たちが保管してきたモノを集めています。モノそのものよりも大切に重要なのは、その持ち主の個人的な体験です。そのため、展示されているすべてのモノには、ユニークで個人的なストーリーが添えられています。戦時下での思い出の品の収集に加えて、博物館はプロジェクト参加者の音声や映像による証言を集めたアーカイブも設置しています。これらの証言には、戦時下の子どもとしての日常生活、すなわち家族との暮らし、住居、生活環境、直接的な危険、砲撃や狙撃の経験、強制退去の経験や難民としての生活、学校、遊びやゲーム、友人関係、余暇、健康、負傷、そして戦時中に失った大きなものなどについての記憶が含まれています。

ボスニア・ヘルツェゴビナ各地で 3,000 点以上の資料を収集し、200 時間以上の証言ビデオを撮影した後、他の国々でも子ども時代の戦争体験を記録する活動へ拡大していきました。現在では、第二次世界大戦、シリア内戦(2011 年~)、アフガニスタンでの戦争、ウクライナでの戦争(2014 年~)

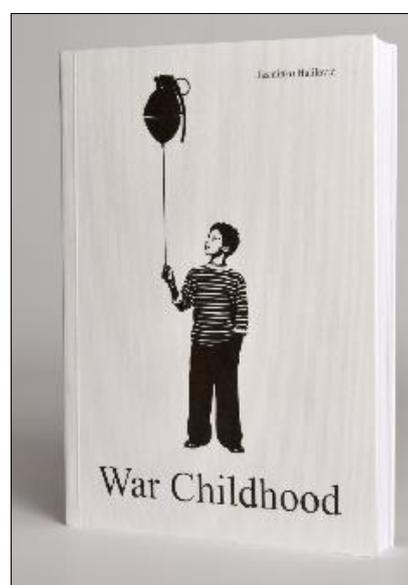
など他の紛争地の体験談も収集しています。博物館の今後 10 年間の目標としては、戦争の影響を受けた子ども時代の体験に特化した世界最大のコレクションを作ることです。博物館では、短期間限定の展示、巡回展示、テーマを絞った展示を作成し、世界中の博物館やギャラリーでその展示を行っています。常設展の他にも、ソーシャルメディア、ウェブサイト、携帯電話のアプリなどを通じた展示も行っています。また、将来の世代に平和な世界を提供することの重要性についての啓発活動を目的とした教育活動も展開しています。学校訪問の受け入れに加え、職員によるワークショップを開催し、教師と密接に協力して年間 5,000 人以上の子どもたちを迎えています。



アルジャジーラが制作した 25 分の美しく感動的なドキュメンタリー（英語字幕付き）は、[こちら](#)で見ることができます。この映像では、3 人の参加者の幼少期の戦争体験、各自が寄付したモノについて、また彼らにとっての博物

館の意味が語られています。さらに、博物館の創設者はその成り立ちを説明し、エグゼクティブ・ディレクターはトラウマや被害者意識を超えた戦時下の子ども時代の多層的な経験について語っています。

詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。また、同館の展示の写真ギャラリーも[こちら](#)でご覧いただけます。



博物館設立のきっかけとなったヤスミンコ・ハリロビッチ Jasminko Holilovic の著書 (2013)

The Pity of War —戦争での市民の犠牲を追悼

英国のチャリティ団体「The Pity of War 戦争の哀しみ」は、長年にわたり、戦争・紛争により被害を受けた無名で声なき市民への認識を高めるための活動を行ってきました。その主な目的は、英国内外の特に若者を対象とした教育プログラムという形での活動や記念碑

の建設を通じて、市民への戦争の影響についての認識を高めることです。記念碑は、英国の彫刻家ピーター・ウォーカーPeter Walkerによる2メートルのブロンズ像で、スタッフォードシャーStaffordshireのリッチフィールドLichfield近郊のNational Memorial Arboretum(NMA:国立アーボリータム(樹木)記念園)に設置される予定です。多くの戦争記念碑の傍らに、これまで慰霊碑を作られることも賛辞が捧げられることもなく、その名前が忘れられてきた何百万人もの人々を記憶するために、この彫刻が設置されることになったのです。この彫刻は平和への願いが込められたシンボルとなることでしょう。



彫刻家ピーター・ウォーカーによる「戦争の哀しみ」の模型

このプロジェクトは、少女時代にブリッツ（ドイツ軍による1940-41年のロンドン大空襲）を経験したシュロップ

シャーShropshireのクエーカー教徒のジョイス・ジーJoyce Geeによって始められました。彼女は、隣の家に爆弾が直撃して住人が亡くなったことに大きな衝撃を受けました。高齢になってからNMAを訪れた彼女は、多くの軍人の記念碑がある一方で、戦争によって直接的・間接的に亡くなったり苦しんだりした何百万人もの一般市民を追悼するものがないことに気付きました。彼女は地元のクエーカーの集会で問題を提起し、支援を得ました。彼女は2018年に亡くなってしまいましたが、その前にNMAが記念碑建設の申請を受理したこと、提案されているブロンズ像の模型を見ることはできました。その詳細と、彼女がこのプロジェクトを紹介する1分のビデオは、[こちら](#)をご覧ください。

この作品は、戦争で犠牲になった市民を象徴する、痛恨で心揺さぶるイメージを表しています。製作者は、目隠しされ、沈黙させられた幼い子どものシンプルな肖像という、特徴を取り除き抽象化することで、戦争の哀しみを表現しています。この彫刻は、語られていない物語や目に見えない（あまりにも知られていない、過小評価された）記憶を認識するものとして設置されるのです。彫刻やNMAの映像とともに、ヨハン・ヴァン・パリズ博士 Dr Johan

van Pays による「戦争の哀しみ Pity of War」についての心のこもった5分のコメントは[こちら](#)、写真ギャラリーは[こちら](#)、また彫刻家ピーター・ウォーカーのウェブサイトは[こちら](#)をご覧ください。

第二次世界大戦の戦闘でトラウマを抱えていた祖父を持つピーター・ウォーカーにとっても、この「戦争の哀しみ」の像は強い意味を持っています。多くの人がそうであるように、この彫刻家の祖父も戦争で自分が見たもの、失った友人、直面した悲劇について語ることなく、帰還後は普通の生活を送ろうとしていました。

ピーター・ウォーカーのもう一つの最新の平和のための作品「[平和の鳩](#) Peace Doves」は、18,000羽以上の紙の鳩をリバプール大聖堂に吊り下げたものです。コロナによるロックダウンの前に、地元の学校の子どもたちや地域のグループなど大聖堂を訪れた人々が、この何千羽もの紙の鳩に平和や希望、愛のメッセージを書き込んでいます。

アンドレアス・ラッコイの記念碑と丸木夫妻

このニューズレターの前号 (No.34, 3月号, pp.15-16) では、オランダのアムステルダム Amsterdam にある反戦小説

家アンドレアス・ラッコオおよびステラ・ラッコオ夫妻 Andreas and Stella Latzko の墓と銅製の記念碑が撤去される危機にさらされていることをお伝えしました。今回、アンドレアス・ラッコオの伝記作家であるゲオルク・B・ドイチュ Georg B. Deutsch が始めた募金活動が、特に記念碑の彫刻家のお孫さんと連絡が取れてから、成功したことをご報告できることは喜ばしいことです。この彫刻家ヤン・ハヴァーマンス Jan Havermans は、オランダ共産党やオランダ彫刻家協会に所属して活躍しており、有名な芸術家でした。



1945年以降、

アトリエでのヤン・ハヴァーマンス

彼の友人の中には、芸術家仲間であり同志でもある丸木位里・俊夫妻がいました。丸木夫妻とは、1955年にアムステルダムの市立美術館 the City Museum で「原爆の図」展が開催された時に初めて（そしてこの時だけ？）会ったのです。丸木夫妻は、1964年に

ハヴァーマンスが亡くなった際、ハヴァーマンスの妻へ心温まるお悔やみの手紙（英語）を送りました。



1964年4月25日付の丸木夫妻からのお悔やみの手紙を収めた封筒

その手紙の中で、丸木夫妻はハヴァーマンスへの深い敬意と感謝の意を表し、彼が「世界平和のため、すべての国の独立のため、労働者のため」に無私無欲で不断の活動を行ってきたことに言及しています。特に、「私たちや『原爆の図』に対して示してくれた彼の優しさと好意」を感謝とともに思い出し、ウィープ・ハヴァーマンス Wiep Havermans 夫人を日本に招き、悲しみを克服する一助となるように自分たちと一緒に過ごすことを提案しました。私たちは、ハンス・ハヴァーマンス Hans Havermans 氏が祖父の書庫で見つけたこの情報（および画像）を共有してくださったこと、そしてラッコ夫妻の墓にある「弱き者を支える強き者 The strong one supporting the weak one」と刻まれている記念碑の保全に貢献してくれていることに感謝しています。

（『原爆の図』については、前掲の記事を参照して下さい。）



エスタン平和の庭園と博物館 (フランス)

オランダ・ハーグの INMP 事務局を運営し（2015年～2018年）、同地にベルタ・フォン・ズットナー平和研究所を設立したペトラ・ケプラー Petra Keppler は、このコロナの時間を利用して、南フランスの中世の村エスタン Estaing にささやかな平和センターを創りました。エスタンは、トゥールーズやモンペリエからは北へ3時間、クレルモン・フェランからは南へ3時間のところに位置しています。毎年、一日に何千人もの観光客がヴァレリー・ジスカール・デスタン元大統領の城を見に訪れますが、彼らは世界平和とその諸機関についてのパネルが設置された平和センターの小さな庭を通ることになります。ボランティアによって運営されている「Le Jardin de la Paix（小さな平和の庭園）」は、年間を通してオープンする予定です。住所は 2 rue du Pont, 12190 Estaing, France です。



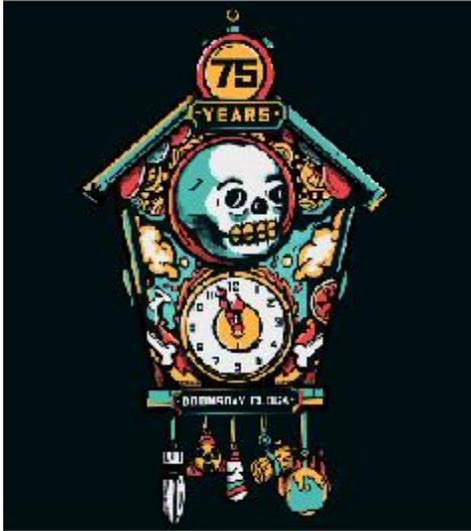
エスタンの平和センターの“小さな平和の庭園 (Le Jardin de la Paix)” (教会のすぐ下で、茶色いドアが Maison Annat アナットの家)。左には城がそびえ立つ

平和センターは、ルイ 14 世の告解を聞く司祭だったジャン・アナット Jean Annat の生家である中世の Maison Annat(アナットの家)にあり、平和のアートをセンターの3つの部屋で展示することになっています。正式なオープンは、フランで戦争や暴力で命を落としたすべての人々を追悼するアルミステイスの 11 月 11 日を予定しています。1918 年のこの日、第一次世界大戦が正式に終結しました。第 1 展示室では、ベルタ・フォン・ズットナーのベストセラー小説『武器を捨てよ (Lay Down Your Arms)』のタイトルに込められたメッセージを紹介します。また、戦意を持ちながら装備の乏しいままドイツ兵と戦うためにエスタンの農民たちを

戦地に送り出した、フランスの戦争動員を批判的に取り上げます。第二次世界大戦後の 75 年間に及ぶフランスとドイツの友好関係にも焦点を当てます。センターでは、国際的な友情の絆を深める若者向けのワークショップも開催します。

世界終末時計 75 周年 デザイン・コンペティション

『原子力科学者会報 *Bulletin of the Atomic Scientists*』の有名な世界終末時計は、今年で 75 周年となります。この記念すべき年に向けて、時計の針を戻す方法を人々に伝えるものや、この雑誌の 3 つの重要分野である「核の脅威 (当初の重要分野)」「気候変動」「破壊的技術」を取り入れたものなど、この時計を再考し再設計するためのデザインを募集しました。デザインは真面目なもの、ふざけたもの、面白いもの、情動的なもの、示唆に富むものでもよいのですが、最も優れた作品とはさまざまな意味で機能するものです。入賞したデザイン (1 つまたは複数) は T シャツとなり、雑誌の Threadbare ショップで販売する予定です。応募期間は 2021 年 5 月 14 日から 6 月 11 日まででした。入賞作品には 1,000 ドルの賞金が授与され、他の入賞作品とともに『世界終末時計 75 周年記念本』に掲載されます。応募されたデザインのいくつかは、[こちら](#)からご覧いただけます。



Muloloyoung 氏による『75 年を数える (75 Years and Counting)』



rodrigobhz 氏による『ばねになろう Be the Spring』

平和アート賞 Peace Art Prize

ドイツ平和運動のネットワーク (Netzwerk Friedenskooperative) は、アートコンテスト「#ArtMakesPart-平和にまつわるアート」を開始しました。このコンテストは誰でも参加でき、どのような形式のアート

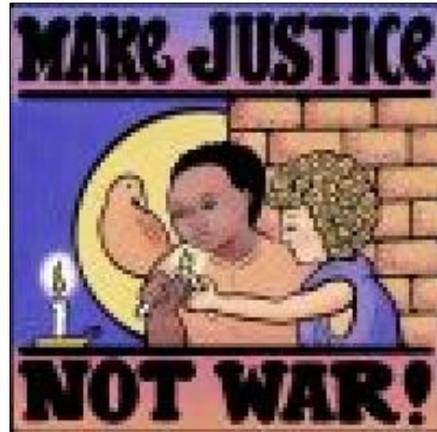
(ビデオを除く)も受け付けています。表現方法やジャンルもアーティスト次第です (キャンバス、落書き、グラフィックデザイン、写真、肖像画、ストリートアートなど)。平和へ向けたテーマとしては、武力紛争・軍縮・教育・環境保護・人権・正義・兵器・戦争などが例に挙げられます。作品は、新しい形式でより多くの人に平和の問題を知ってもらい、新しいグループに平和運動に参加してもらうことを目的としています。締め切りは6月30日です (既に終了)。コンテストやこのネットワークについての詳細は、[こちら](#)をご覧ください。



#ArtMakesPart アート賞のポスター

戦争に代わるもの Alternatives to War

サンドラ・ウレ・グリフィン Sandra Ure Griffin は、製版 printmaking を学び、子ども向けの文章とアートのプログラム「絵本を制作する Picture Book Making」を展開する米国のアーティストです。これまでに2,000人以上の子どもたちが自分の絵本を作るのを手伝ってきました。また教師を対象に、絵本製作の過程が学べるワークショップも開催しています。



彼女の作品には、戦争に代わるものを描いた、カラフルでユーモアあふれる想像力豊かなシリーズがあります。彼女は、戦争に代わるものは無限にあると言い、彼女のシリーズ「戦争に代わるものを *Alternatives to War*」では、アルファベットに相当する 42 のデザインを提供しています。戦争をする代わりに、アート・バスケット・ビール・本・朝食・橋・コーヒー・友人・庭・干し草・正義・愛・音楽・平和・豆・ピザ・詩などを作るべきだと提案しています。私たちが熟考してもっともやりたくないことは、戦争です。デザインには、白黒やカラーのもの、サイズもカード（お揃いの封筒付き）や通常の高さまたは大判のもの、光沢のあるプリント・光沢のないプリントがあります。すべての絵は、保管に適した紙に印刷され、サインと日付が入っています。これらの楽しいシリーズは[こちら](#)でご覧いただけます。アーティストに関する情報や作品の注文は、彼女の[ウェブサイト](#)をご覧ください。

「幌馬車」コーヒーハウスの焼失 50 周年(米国アイダホ州)

今年後半には、「幌馬車」コーヒーハウス Covered Wagon Coffeehouse の焼失 50 周年が催される予定です。アイダホ州のマウンテンホーム Mountain Home 米空軍基地近くのコーヒーハウスが、1971 年 11 月 21 日に焼失しました。このコーヒーハウスは 1971 年初め、劇場を改築して開店したもので、ベトナム戦争の時代に全米で広がった反戦運動の一環として開設された施設の一つ

でした。米軍基地近くに建てられることが多く、兵士たちの間の反戦や軍隊への反発の気持ちを支える手段の一つとして、主に市民の反戦活動家たちによって運営され、兵士(GI)も多く参加していたのです。軍事基地の近くにあるため軍を支持する人たちの敵意に直面しつつも、これらの施設は GI の重要な反戦運動に貢献してきました。ベトナム戦争の時代に最初にできた GI コーヒーハウスは 1968 年にオープンし、最後の店が閉じられたのは 1974 年でした。

「幌馬車」コーヒーハウスは、良心的兵役拒否の立場から空軍の除隊を望んでいるマウンテンホーム基地の兵士たちのカウンセリングを行なっていました。“大量殺戮マシン genocide machine”のように、空軍が東南アジアの人々の上に、ヒロシマの原爆の3発分に匹敵する爆弾を毎週投下していることに対する抵抗の気持ちが高まっていたのです。除隊した人々は、しばしば、反戦ベトナム帰還兵 Vietnam Veterans Against the War と共に活動を続けました。基地の兵士たちは、『救いの手 *The Helping Hand*』と呼ばれる地下新聞を発行し始めました。アイダホの町の軍を支持する組織は敵意を高め、コーヒーハウスに対して脅迫的な活動を行なうようになりました。



マウンテンハウス空軍基地 GI 地下新聞の題字 (1971-1974)

地域の新聞には「幌馬車」とそのメンバーに対する暴力的な攻撃を促す投書が掲載されたのです。そして、1971年11月21日にコーヒーハウスは、正体不明の放火犯によって焼失してしまっただけでなく、この襲撃は、全国のメディアで報道されました。その中には破壊に抗議し、再建の援助を願う [このような書簡](#) も含まれていました。ノーム・チョムスキー、ジェーン・フォンダ、ハワード・ジンなどの著名人も署名しています。そして、1971年12月30日号の「ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス *New York Review of Books*」で公表されました。

幌馬車ミュージシャン Covered Wagon Musicians が作詞し演奏した「ナパーム弾を子どもたちに *Napalm Sticks to Kids*」は、4分間の歌で、1972年のアルバム『戦争反対を唱える！ *We say No to Your War!*』に収録され、[ここから聞くことができます](#)。

「幌馬車」の歴史は [このリンク](#) から、GI コーヒーハウスの歴史は [ここで読む](#) ことができます。

新刊案内



(1) サイド・シカンダール・メイディ Syed Sikander Mehdi 教授は、国際科学会議 International Science Council のウェブサイトに掲載された「平和のための記憶、記念碑、博物館 *Memories, memorials and museums for peace*」と題する短い記事の中で、平和博物館の癒しの力について論じています。：

<https://council.science>

(2) ナンシー・ヤウア Nancy Jouwe 「博物館で既存の知識を捨て去る場 *Sites for Unlearning in the Museum*」は、ビンナ・チョイ Binna Choi 他編『既存の知識を捨て去る(学び直す)のための演習—知識を捨て去るの場としての芸術組織 *Unlearning Exercises. Art Organizations as Sites for Unlearning*』(Casco Art Institute, ユートレヒト & Valiz, アムステルダム, 2018 年)の中の 1 章です。著者は、女性の権利、国際的な運動、そして芸術・文化・遺産の結びつきについての文化史の専門家であり、学芸員でもあります。彼女の記事は [こちら](#) で読むことができます。電子書籍は [このリンク](#) から無料でダウンロードできます。

博物館では、長年、世界の多くの部分を排除してきました。西洋社会の「多文化」化をはじめとするグローバ

ル化に刺激を受けて、「脱植民地化」の思考と要求が広まり、博物館は「脱植民地化」する努力をするようになってきました。最初は民族学博物館に存在する植民主義的な考え方や展示方法に対峙し、それを是正するための努力として始まったものが、博物館や芸術の世界全般に拡大しているのです。ヤウアはこのテーマを詳しく説明していますが、それに加えて、このテーマは撤去・交換・修正が求められるようになってきた彫像への眼差しにも影響を与えていると言えます。博物館を「非軍事化」する必要性についての同様の過程は、まだ現実になっていませんが、今後起こると予想されます。これは、「非軍事化された(あるいは非暴力的な)」思考に必然的に付随するものでしょう。戦争や戦士たちは、世界中の無数の博物館や彫像で記念され、称えられているのに対し、平和と平和主義者、戦争への抵抗者、良心的戦争拒否者は、博物館や記念碑ではほとんど追悼されず、称えられてもいないのです。

(3) レスリー・A・スサン Leslie A. Sussan 『人生の選択 私の父のハリウッドから広島への映画界における道程 *Choosing Life. My Father's Journey in Film from Hollywood to Hiroshima*』(2020 年) および、同著者による論文「ハリウッドから広島へ：私の父の映画人生の行路を辿る *From Hollywood to Hiroshima: Retracing my father's*

cinematic journey」(原子力科学者会報 *Bulletin of the Atomic Scientists*, 2021年6月8日号)

第二次世界大戦が終わり、日本が占領されていた1946年、米国陸軍の従軍写真家ハーバート・スサン Herbert Sussan は、長崎と広島への原爆投下の成果を記録するため、米国戦略爆撃調査団に参加しました。彼は長崎に初めて到着した時から、何かこれまでにない恐ろしいことが起こったと感じ、その結果、特に原爆の被害を受けた人々(被爆者)の今なお続く苦しみを記録として残さなければならないと考えました。米国政府は、この悲惨な映像を極秘扱いとし、何十年もの間、米国国民に公開しませんでした。スサンはその公開を求めて何年も費やしました。彼の娘である著者は、1987年に彼の足跡をたどり、40年以上前に彼が撮影した被爆者たちに会いました。著者は、原爆によって引き起こされた筆舌に尽くしがたい人間の苦しみを記録するという新たな使命を自分の父親がどのようにして担うことになったのか、またそのことがどのように彼の人生を変え、また彼女の人生をも変えていったのかを描いています。この本には、グレッグ・ミッチェル Greg Mitchell による序文が掲載されています。

岩倉務は、1978年にニューヨークの国連で開催された核軍縮展でハーバート・スサンと出会いました。彼は公開

禁止にされたカラー映像の存在を知って関心を持ち、1980年に相原和光(広島YMCA 総主事)と一緒に、日本全国で展開する草の根運動「10 フィート運動」を立ち上げました。この運動は、1人につき3,000円の寄付で公開禁止にされたフィルムを10フィート(304.8cm)分ずつ買い取るとされたことからそのように呼ばれました。NHKの協力もあり、このようにして集められた募金の結果、10万フィートの映像と写真を購入することができ、後に3本の映画に使われました。購入が可能になったのは、1976年に米国で情報自由法が制定されたからでした。岩倉は、広島・長崎の原爆被害の写真・映像記録を広範に集めた日本平和博物館を首都圏に設立するために率先して活動しました。このオンライン博物館についての詳細は[こちら](#)をご覧ください。

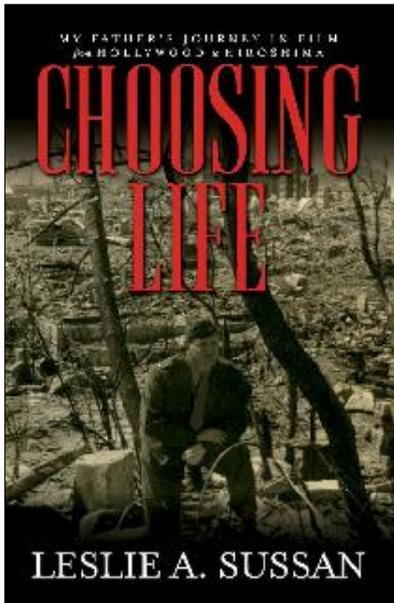


1946年、長崎で再開されたばかりの学校の教室で撮影中のハーバート・スサン
(写真提供：米国陸軍)

レスリー・スサンと彼女の著書については、[こちら](#)と[こちら](#)の情報もご覧

ください。彼女の記事は[このリンク](#)で見ることができます。

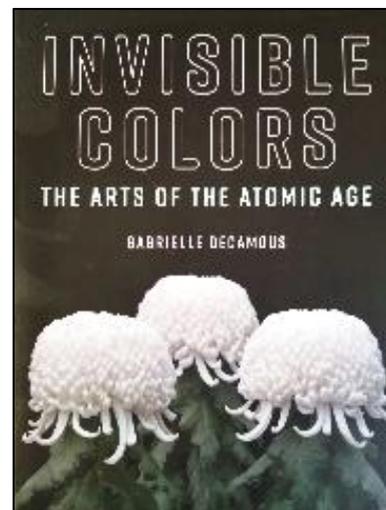
(7頁の記事「映画『原爆の隠蔽 *Atomic Cover-up*』」も参照)



(4) ガブリエル・デカマス Gabrielle Decamous 『見えない色：原子力時代の芸術 *Invisible Colors: The Arts of the Atomic Age*』(マサチューセッツ工科大学出版局 MIT Press, 2019年)。

本書は、芸術(グラフィックアート、写真、映画、文学)の観点から、原子力時代を探究しています。原子力時代の出来事に対応して作られた芸術作品に焦点を当てており、世界の多くの地域を網羅しています。広島・長崎・福島・チェルノブイリ・スリーマイル島などの有名な核災害に触発された作品だけでなく、核実験場やウラン鉱山、冷戦時代の放射能で汚染された風景から生まれた作品などを地域ごとに整理

し、紹介しています。特に、オセアニア地域での芸術制作の歴史の記述は特に心を打つものです。著者は、アメリカとヨーロッパが歴史的にこの地域をどのように何もない空間として見てきたかということを説明しています。フランスだけでも1960年代から1990年代にかけてポリネシア Polynesia で181回の核実験を行い、そのうち41回は大気圏内核実験でした。



ムルロア Mururoa 環礁とファンガタウファ Fangataufa 環礁の人々は、フランスからの独立と、放射能の災難からの解放を求めています。彼らは詩で(西洋ではほとんど知られていませんが)、彼らの怒りを表現し、フランスやその他の世界中の国々での彼らの苦境に対する沈黙に挑戦するようになりました。著者は、芸術的な主張に関して、東洋のものが西洋のものに埋もれてしまうことが多いことに気付いたのです。広島と長崎の原爆の写真が検閲されたことなどもありました。詳しく

は、[「芸術家の目から見た原爆時代の恐怖 *The horrors of the atomic age through artists' eyes*」](#)をご覧ください。

(5) 『ビジュアル・ガイドブック：何世紀にもわたって続いてきた人種差別的なイメージが、1年でどのように取り払われたか *How centuries of racist images came down in one year – a visual guide*』

英国の新聞ガーディアン The Guardian から、アルビン・チャン Alvin Chang とケイリン・ドッドソン Kaylin Dodson によるこの素晴らしいガイドが出版されました。彼らは、2020年5月に米国で起きた警察官によるジョージ・フロイド George Floyd 殺害事件後の「ブラック・ライブズ・マター the Black Lives Matter（黒人の命は重要だ）」の抗議活動が、日常生活におけるイメージの再検討を引き起こしたことを記録しています。それは、米国や世界中で、時には公式に、時には非公式に、人種差別的なイメージを削除する新たな取り組みに拍車をかけました。米国では、約170の南北戦争時の南部連合の記念碑が撤去され、クリストファー・コロンブス Christopher Columbus やスペインの征服者、アメリカ先住民を奴隷にした人たちの像も撤去されました。また、世界の他の地域でも、植民地主義や帝国を象徴し称賛する像が、市当局や市民によって頻繁に撤去されています。このガイドでは、州ごと、国ごとに、関係する像を特定し、説明

し、画像で示しています。今後、さらに多くの銅像がこのガイドに追加されることが期待されています。また、人間性を尊重する英雄にふさわしいけれど、今のところ評価されていない人物のために建てられた銅像をリストアップした新しいガイドが登場するかもしれません。このガイドは[こちら](#)からアクセスできます。

(6) 『共謀: 2020年の世界の核兵器に関わる支出 *Complicit: 2020 Global Nuclear Weapons Spending*』

核兵器廃絶国際キャンペーン The International Campaign to Abolish Nuclear Weapons (ICAN) は、隠されていた事実を明らかにする報告書を発表しました。序文では、2020年に世界の大半の地域で新型コロナウイルスのパンデミック(感染拡大)で被害を受けているにもかかわらず、核兵器へ財政支出を行い開発・製造を行っている国々にとっては、そのビジネスは通常通りであったことを指摘しています。病院のベッドが患者であふれ、医師や看護師が長時間働き、基本的な医療用品が不足する中で、9カ国が大量破壊兵器のために720億ドル以上の財政支出を用意していることが判明したのです。これは前年度に比べて14億ドル増えています。報告書によると、核兵器の製造に関わる企業は、核兵器を含む巨額の「防衛」支出を認可してもらうために、政策立案者に1億ドル以上かけてロビー活動を行いました。これは、ロビー活

動に1ドル費やすごとに平均236ドルの核兵器に関する契約金が戻ってきていることを意味します。結果として、これらの企業は多額の利益を得ています。この報告書の全文は[こちら](#)からご覧いただけます。



退任する編集長からのメッセージ

1992年に英国ブラッドフォード Bradford で開催された第1回国際平和博物館会議で、国際平和博物館ネットワーク the International Network of Peace Museums (INPM) が設立されたとき、コミュニケーションと協力を促進するために、年2回のニュースレターを発行することも決められました。最初の15号(1993年5月~2002年10月)は、その会議のスポンサーだった英国のクエーカー教徒の慈善団体“Give Peace a Chance Trust(平和にチャンスを与えよ)”という信託財産委託団体によって発行・配布されました。創刊号は4ペ

ージ、最終号は40ページでした。これらの初期のニュースレターは[こちらのリンク](#)から読むことができます。2011年5月、ハーグ Hague に INMP の事務局が開設されたのを機に、ニュースレターの出版が再開されました。再開後の最初の9号分の制作と配布は、事務局の管理者であるニケ・リスカルジェット Nike Liscaljet が担当しました。当初は年2回の発行でしたが、2015年からは四半期ごとに発行されるようになり、編集担当スタッフも新しくなりました。今回の2021年6月号(第35号)で、第2期のニュースレターを発行して10周年となります。2011年以降のニュースレターは[こちら](#)から読むことができます。



2017年にベルファストで開催されたINMPの第9回国際会議で、安齋育郎氏がピーター・ヴァンデン・デュンゲン博士に贈った巻物感謝状左は山根和代氏、右は古賀徳子氏。

第1期と第2期を合わせて、ニュースレター50号の発行は、編集長(すべての未署名記事の責任者)である私が退任するのに丁度よい区切りの時期となります。必然的に、記事の選択は個人的な関心や好み、情熱に影響されてきました。例えば、核兵器廃絶、平和の遺産と歴史、ピーストレイルと記念碑、反戦と平和を主題とした芸術、記念日、

過去と現在の「平和の勝者」（アルフレッド・ノーベル Alfred Nobel が 1895 年に残した遺言）などです。平和博物館（および反戦博物館）は、広義の平和のための博物館の大きなネットワークを表す同心円の中心に位置しています。これらの博物館はすべて、来館者に情報を提供し、刺激を与え、関心を持って関わっていただくという目的を共有しているのです。そして他の多くの博物館よりも、生と死の問題を扱い、軍国主義、暴力文化、死と破壊、そして絶滅の可能性から遠ざかるような世論を形成することができるのです。核時代以前にも、平和博物館の先駆者であるヤン・ブロッホ Jan Bloch とエルンスト・フリードリッヒ Ernst Friedrich が、第一次世界大戦の前後にそれぞれの博物館を設立したのは、このためでした。

安齋育郎教授、山根和代博士、キア・キム Kya Kim 氏（また、キヤ・キムさんの前のロバート・コワルチャック Robert Kowalczyk 教授）には、過去 10 年間、ニュースレターの体裁を整える仕事を含めて編集作業に加わっていただき、感謝しています。また、寄稿してくださった方々、記事の提案をしてくださったコリン・アーチャー Colin Archer 氏とジェラルド・レースブロック Gerard Loessbroek 氏にも感謝しています。また、山根和代博士とその助手の方々のおかげで、ニュースレターは日本語に翻訳されています。ニュースレターの内容をより利用しやすくするために、過去 10 年間に発行された 35 号

分の詳細な索引を今年の後半に発行する予定です。この作業のほとんどは、ハーグにあるベルタ・フォン・ズットナー平和研究所 the Bertha von Suttner Peace Institute のボランティアであるアニカ・ワレングレン Annika Wallengren 氏が、同研究所のペトラ・ケプラー Petra Keppler 所長の提案に基づいて行っています。

新しい INMP コーディネーターチームは、この機会に新しい取り組みを導入し、世界中のより多くの読者に向けてこのニュースレターを発信していこうとしています。今後、INMP の使命を果たすための重要な手段としての役割を保ちつつ、このニュースレターが展開していくことを願ってやみません。

編集後記

この INMP 通信は、ピーター・ヴァンデン・デュンゲン、山根和代、安齋育郎、キヤ・キムが編集を担当しています。この編集チームが編集する最後の号となりましたが、寄稿者の皆様、翻訳者の皆様、翻訳費用をご負担いただいた皆様に感謝申し上げます。

次号からは、新たな編集体制でお届けします。

読者の皆様におかれましては、定期的な通信の購読を希望される場合は、電子メールを inmpoffice@gmail.com までお送りください。なお、次号の記事投稿の締め切りについては、追ってお知らせいたします。これは、編集体制が一新されるためです。